

「九州中国学会報」第二十九卷抜刷
平成三年四月

『還魂記』における梅花の形象

根
ヶ
山

徹

『還魂記』における梅花の形象

根ヶ山 徹

明代万曆期屈指の劇作家として後代に至るまで広く江湖にその戯曲が喧伝された湯頭祖（一五五〇～一六一六）の作品は、決して彼の人生と切り離して考えることができない。戯曲は元来、劇場で上演されるべきはずのものであるが、周知のごとく南戯の場合は読むための文学としても行われた。湯頭祖の作品も決してその例外ではなく、^①案頭の書として読んだとき、作品中には彼自身の心情を影写した叙述をしばしば見出すことができる。

本稿で取り上げる『還魂記』は、万曆二十六年（二五九八）、彼が徐聞流謫、遂昌量移を経、棄官して故郷の臨川に閑居した年の秋に一応の完成を見た作品である。この嶺南流謫は彼自身に直截の原因があるのではなく、万曆帝に扈從する佞臣達の陰謀に拠るものであったため、不当な処断に対する憤り、そして苦悩は生半なまなかのものではなかったはずである。^②ために作品中に流謫に至る経緯、徐聞、遂昌での経験が直接間接に織り込まれることになったのではないか。作者湯頭祖のこうした境遇に鑑みて、嶺南行が彼に齎した苦悩が『還魂記』中に具体的にどのような影響を及ぼし、どのような形で現われているかを考察しようとするのが本稿のねらいである。^③これまでの『還魂記』研究は、主にこの劇の情節の展開に焦点をあわせ、柳夢梅と杜麗娘との生死を超越した情の完遂を論ずるものがその概ねであり、作

者の人生と作品との関わりを対象とするものは殆んど見られなかった^④。もちろん『還魂記』には情の結実を賛美する一面も有するが、その一方で作品中の花木、とりわけ梅花には、藍本には見られない新たな形象が附与されており、そこには湯頭祖の何らかの意識が投影されていると考えられるのである。

二

『還魂記』は話本「杜麗娘記」を藍本として用いている^⑤。劇情は話本の叙述を襲用して生死を超越した男女の情愛を描き出しているものの、もとより湯頭祖が新たに創作した箇所も少なからず散見する。この新たに筆の加えられている部分にこそ湯頭祖の心情が寄せられていることは言うまでもない。

湯頭祖が『還魂記』の主人公柳夢梅を自らの分身、理想像のごとく形象化し、柳夢梅の形象が話本とは完全に異なっていたこと^⑥、そしてまた仮飾のない真情の発露を、柳夢梅による杜麗娘蘇生という劇情に託していることは、別稿において既に述べたとおりである。そこで柳夢梅像を話本のそれと再度比較検討してみると、『還魂記』にのみ特徴的な事柄を更に見出すことができる。

まず「杜麗娘記」の柳夢梅像は次のようである。

且説新府尹、姓柳、名思恩、乃四川成都府人、年四十、夫人何氏、年三十六歳。夫妻恩愛、止生一子、年一十八歳、喚做柳夢梅。因母夢見食梅而有孕、故此爲名。

ところで新(南雄)府尹は、姓を柳、名思恩と言い、四川成都府の人で、年は四十歳。夫人の何氏は三十六歳。夫婦の恩愛は厚く、ただ一子だけを儲けたのが十八歳になり、柳夢梅と言った。母親が梅を食べるのを夢に見て身籠ったので、こう名附けたのである。

この部分は『還魂記』では次のように増改されている。

(生) 小生姓柳、名夢梅、表字春卿。原係唐朝柳州司馬柳宗元之後、留家嶺南。父親朝散之職、母親縣君之封。「歎介」所悵俺自小孤單、生事微渺。喜的是今日成人長大、二十過頭、志慧聰明、三場得手。只恨未遭時勢、不免飢寒。……每日情思昏昏、忽然半月之前、做下一夢。夢到一園、梅花樹下、立著箇美人、不長不短、如送如迎。說道「柳生、柳生、遇俺方有姻緣之分、發跡之期。」因此改名夢梅、春卿爲字。

(第二齣「言懷」)

(柳夢梅) わたしは姓を柳、名を夢梅、字を春卿と言ひ、唐の柳州司馬柳宗元の後裔で、嶺南に住みついています。父は朝散大夫の職を授かり、母は縣君に封ぜられていました。「歎くこなし(思い入れ)」「恨むらくは、わたしは幼少より一人きりで、やっとのことで暮らしを立てて参りました。喜ばしいことに、今日、成人することができ、年も二十歳を過ぎ、聰明なるが故に郷試にも合格できました。いかんせん時運にめぐりあわず、飢えと寒さから逃れることができません。……毎日もの思いに耽っておりましたところ、半月ほど前に、ふと夢を見ました。夢の中で花園に行きますと、梅の樹の下に美人が立っており、高からず低からぬ背丈、送るがごとく迎えるがごとく素振りでした。その美女は「柳さま、柳さま、わたしにお会いになりましたからには、婚姻の宿縁、ご榮達のときがございましょう」と言いました。かくて名を夢梅と改め、春卿を字としたのです。

柳夢梅に関する形質の差異が、出自、境遇、命名の由来の三点であることは言うまでもない。そこで本稿では前稿において触れることのできなかった柳夢梅命名の由来を手懸かりに考察を進めることにする。

まず話本の場合は、母親が梅の実を食べる夢を見て妊娠したため「夢梅」と名附けたとされている。一方、『還魂記』では、梅花樹の下で美女に後日の婚姻、榮達の宿縁を暗示される夢を見て改名したとされる。このように命名の由来は両者共に「梅」を契機としたものとして描かれているけれども、湯頭祖は作品中の柳夢梅を「柳が梅を夢みる」という名前の実質に即したものに改めており、しかもそれは作者の経験に基づいた改変なのである。

先に触れたように、万曆十九年（一五九二）九月、湯頭祖は謫地徐聞に赴くべく故郷の臨川を旅立った。同月下旬から翌十月初旬、梅嶺を越えて広東に足を踏み入れ、広州からは舟に乗って、十一月になってようやく謫地に到着した。湯頭祖はこの嶺南流謫の旅途、十月下旬から十一月上旬にかけて羅浮山を経由している。周知のごとく、羅浮山は趙師雄が梅花樹下で美女と酣飲した夢を見、醒めると美女は梅花樹の化身であったという「趙師雄醉憩梅花下」故事（『龍城記』卷上^⑧、所収）で知られている。湯頭祖も羅浮山において、たとえば次のごとき詩を残している。

羅浮山簾泉避雨蝴蝶洞、遲南海崔子玉不至（『玉茗堂全集』・詩・十二）

洞中隱風雨 洞中に風雨を隠る

夢蝶愁飛舉 夢蝶 飛舉を愁ふ

美人濕不來 美人 濕うるはひて來らず

暗與梅花語 暗ひそかに梅花と語らん

『遊羅浮山賦』序（同・賦・二）には、この詩を詠んだ当時の情況が次のように述べられている。

辛卯の冬十月、始めて出でて徐聞に尉たるを以て、令尹の崔子玉を南海より速まき、文學の翟從先を東莞より遅むかへ、川墟を泄いで、原隰を履ふみ、朱明曜眞の館に宿り、晴霏を候つ。蓋し晦夕なればなり。詰朝の朔、微雨あるも、梅墟を襲い、石門を經、泉を葉大夫春及の廊阿に聽く。明日、大簾泉を觀、雨を避く。

湯頭祖は羅浮山にて崔子玉と翟繩祖を招いたけれども、前掲の詩題に言うように崔子玉は結局訪れて来なかったようである。かくて大簾泉の蝴蝶洞にひとり雨を避け、もの言わぬ梅花に語りかけ、趙師雄に想いを馳せつつ流謫の途にある我が身を慰めようとしたのではないか。上述の柳夢梅像の設定のモチーフは、恐らくこの羅浮山での經驗を基盤に据えているであろう。『還魂記』の劇情は柳夢梅と杜麗娘との夢の符合を契機として急速に進展するが、第十二齣「尋夢」で杜麗娘が唱う「二犯么令」においても、後花園で見た夢を趙師雄の故事に重ねて「羅浮夢」と呼んでいる。

愛殺這畫陰便、再得到羅浮夢邊。

この晝間の樹陰こそいと慕わし、願はくば再び羅浮の夢境に到らんことを。

このように流謫の旅途の経験を踏まえながら『還魂記』中に織り込まれた梅花のイメージは、後の劇情の展開に密接に関連しており、そこには湯頭祖の特別な感懐が込められていることが予測される。一方、藍本の「杜麗娘記」の場合は、杜麗娘が夢に見た書生（柳夢梅）に恋い焦がれて命を落とし、亡魂となって現われた彼女と書生とが交歓してやがて蘇生するという内容に主眼を置いた、いわゆる冥婚譚であるため、あくまでも杜麗娘が叙述の中心であり、柳夢梅の命名の由来は必ずしも話柄の展開に関わりがない。こうしたことから『還魂記』における梅花には、単に劇情の展開のためだけでなく、作者湯頭祖の何らかの心情が寄託されていると考えることができるのである。

三

『還魂記』においては、柳枝を手にした柳夢梅が杜麗娘と契りを結んだことから、柳枝にも特別な意味が附与されているが、梅花については柳枝以上に象徴的なニュアンスを備えている。もとより「梅」字は「媒」字と通じており、当然、作品中の柳夢梅と杜麗娘との仲媒を象徴している。⁹⁰しかしながら梅花は、単に柳夢梅の名前に詠み込まれ、また杜麗娘が慕った花として描かれて、柳夢梅と杜麗娘の接点のごとく取り扱われているだけではなく、時には柳夢梅自身をも指しているのである。ここでは、まず作品中の梅花が、どのような場面で、どのような形で現われているのか、そしてそれがどのような意味を持つのかを見てゆくことにしたい。

第一齣「言懷」は、柳夢梅が夢の中で美女に将来を約束されたものの、現実には嶺南での落魄した生活を余儀なくされている場面である。ここでは、未だ独り身で栄達も果し得ぬ辛い心情を、「柳」「梅」という自分の姓名を嵌め込

んだ詞に託し、苦境からの脱却を夢想している。

【九迴腸】「解三醒」(生)……還則怕嫦娥妬色花類氣、等的俺梅子酸心柳皺眉、渾如醉。「三學士」……有一日春光暗度黃金柳、雪意衝開了白玉梅。

(柳夢梅)「解三醒」……なほ恐るるは、嫦娥の妬みに花萎れ、我れを待ちて梅實は心を痛めて柳眉に皺寄するを。すべては酔へるがごとし。「三學士」……いつの日か春の光暗かに黄金の柳に降り注がば、雪の意にわかに白玉の梅を開かしむ。

一方、杜麗娘は後花園にて柳の枝を手にした書生と契りを交わす夢を見る(第十齣「驚夢」)。後日、夢中の飲会を追懐して後花園に遊んだ際に累々と実をつけた梅樹に目を奪われ、死後は梅樹の根元に葬られて、書生と再会できる日待ちたいと願う。第十二齣「尋夢」である。

【江兒水】(旦)偶然閒心似繾、梅樹邊、這般花草草由人戀、生生死死隨人願、便酸酸楚楚無人怨。待打併香魂一片、陰雨梅天、守的箇梅根相見。

(杜麗娘) 思いがけずも心惹かれし梅の樹のもと。花や草は人の戀ふるまま、生死も人の願いのままならば、艱難辛苦を嘗むるとも人の怨む無し。我が魂を一つにあわせ、梅雨空の下、梅の根方を離れず相ひ見ゑたし。

かくして杜麗娘は、夢の中の情交が原因となって恋い患いに罹り(第十八齣「診祟」)、自らの春容を描き残して病死し、遺言のとおり梅花樹の下に埋葬される(第二十齣「鬧塚」)。

柳夢梅が柳枝を手折って杜麗娘との飲会に臨んだこと、杜麗娘が柳夢梅との飲会を回想して後花園の梅樹に心を奪われる、という以上の設定は基本的には話本と同様である。更に柳が柳夢梅を指し、梅が杜麗娘の慕った花卉として取り扱われている点も、双方にさまで隔たりはないけれども、梅花(梅樹)が杜麗娘のみならず柳夢梅とも密接な関係をも有するのは、やはり『還魂記』に特徴的な事柄と言わざるを得ない。

さて柳夢梅は、広東での零落した生活から脱け出し、科挙の試験を受けるために梅嶺を越え、南安府に足を踏み入れる。第二十二齣「旅寄」の一場面である。話本での柳夢梅は、先に掲げたように杜麗娘の父親杜宝の後任として南雄府尹に着任した父柳思恩に付き随って南雄に来たと設定されており、『還魂記』とは全く異なっている。

〔生〕『香山嶼裏打包來、三水船兒到岸開。要寄郷心值寒歲、嶺南南上半枝梅。』

〔柳夢梅〕香山嶼より包みを負ふて來たり、三水の船岸に到りて開く。郷心を寄せんと要するも寒歲に値ふ、嶺南より南上す半枝の梅。

ここに言う「半枝の梅」とは、言うまでもなく柳夢梅のことを指している。すなわち広東から北上して南安に足を踏み入れた自らを、南枝の梅に擬えているのである。

次に掲げる第二十三齣「冥判」の幽冥界での杜麗娘審判の場面においては、彼女が「柳」と「梅」に心を奪われていることを言う。

〔么篇〕〔淨〕他陽祿還長在、陰司數未該。禁煙花一種春無賴、近柳梅一處情無外。

〔判官〕彼女の陽祿なほ長く、陰司の數いまだ當らず。煙火を鎮めんとするも春は寄る邊無く、柳と梅に近づきて心のほかに懸かるなし。

第二十六齣「玩眞」は、梅花蕃観で静養している柳夢梅が後花園で杜麗娘の描き残した絵姿を見附け、そこに題されている詩を見てそれに次韻する場面である。この柳夢梅の詩には、杜麗娘の題詩に呼応して「柳」と「梅」との相関性が詠み込まれている。

〔啼鶯序〕〔生〕〔唱〕他青梅在手詩細哦、逗春心一點蹉跎。小生待畫餅充饑、小姐似望梅止渴。……

〔白〕……暮地相逢、不免步韻一首。（題介）『丹青妙處卻天然、不是天仙即地仙。欲傍蟾宮人近遠、恰些春在柳梅邊。』

〔柳夢梅〕「唱」彼の人は青梅を手に微かに詩を口ずさみ、しばし春心を掻き亂さるるも我が想ひ果せじ。我は畫ける餅もて餓えを満たさんとし、お嬢様は梅を眺めて渴きを癒さんとす。……

〔白〕……不意にお會いしたとあらば、次韻の一首もせねばなるまい。「詩を書きつけるこなし」「丹青の妙處卻って天然、是れ天仙ならずんば即ち地仙。蟾宮に傍はんと欲す人近遠、恰も春は柳梅の邊に在り。』

因にこの部分、話本では「柳」「梅」の相関性を示唆するものにはなっていない。

亦題一絶以和其韻、詩曰『貌若嫦娥出自然、不是天仙是地仙。若得降臨同一宿、海誓山盟在枕邊。』詩罷、歎賞久之。却好天晚、這柳衙内因想畫上女子、心中不樂。正是不見此情情不動、自思何時得此女會合。恰似望梅止渴、畫餅充饑。

〔柳夢梅も〕また絶句を題して次韻し、その詩は『貌は嫦娥の若く自然に出づ、是れ天仙にあらんずんば是れ地仙。若し降臨して一宿を同にするを得ば、海誓山盟 枕邊に在らん。』というものであつた。題し終わると、しばらくのあいだ歎賞した。折しも日が暮れ、この柳衙内は畫上の女性のことを想ひ詰めたがため、心中鬱鬱として樂しまなかつた。これこそ「美人に會つたばかりに心が動いた」というもの、いつになつたらこの女性と會うことができるのか想ひ迴らせていた。それは、まるで梅をながめて渴きを癒し、繪に畫いた餅で餓えを満たすようなもの。

また同齣の上掲の箇所が続く場面でも、柳夢梅は「梅」と「柳」との相関性を看取する。

【尾聲】（生）拾的箇人兒先慶賀、敢柳和梅有些瓜葛。小姐小姐、則被你有影無形看殺我。

〔柳夢梅〕美女の畫像を拾ひ得て先づは慶ばん、恐らくは柳と梅とに縁あり。お嬢様、お嬢様、影ありて形なき君に見詰めらる。

第三十九齣「如杭」は、杜麗娘を蘇生させた柳夢梅が、杭州へ応試に赴く場面である。

【前腔（小措大）】（生）十年窗下、遇梅花、凍九纒開。

（柳夢梅）十年の讀書の日々、凍てつける長き冬を経て、梅の花ようやく綻ぶ。

この唱は柳夢梅が自らを「梅花」に比擬し、彼女に会って後、「凍九」（凍てつける冬）、すなわち落魄した生活から、「纒開」（開花）、ようやく脱け出せそうであることを唱ったものと考えられる。

第四十四齣「急難」の次の唱は、杜麗娘が「柳枝」に心を絆されて後花園の「梅花樹」を愛し、樹下に葬られたことを回想したものである。

【榴花泣】（旦）白雲親舍、俺孤影舊梅梢、道香魂恁寂寥、怎知魂向你柳枝梢。

（杜麗娘）父母は白雲たなびく邊りに、我れは寂しく古梅の梢しすえにあり。香魂はかくも寂寥なるか、怎いかで知らん、君が柳枝に驚きて我が魂のぬけしを。

第四十八齣「遇母」では、杜麗娘が母親、そして侍女の春香に再会し、自分が蘇生することのできた理由を説明する。ここでは春香が曾ての杜麗娘の夢のことを思い出し、「梅」と「柳」との相関性を改めて感じ取る。

（老旦）書生何方人氏。（旦）是嶺南柳夢梅。（貼）怪哉、當真有箇柳和梅。

（甄氏）その書生はどちらの何と言ってお方なの。（杜麗娘）嶺南の柳夢梅とおっしゃる方です。（春香）あら不思議、本當に柳と梅がございましたのね。

杜麗娘は第五十四齣「聞喜」においても、柳夢梅が手にした「柳葉」に心を奪われ、「梅根」に埋葬されることを願った往日を回顧している。

【滴溜子】（旦拜介）當日的、當日的梅根柳葉、無明路、無明路曾把遊魂再疊。

（杜麗娘）「拜禮するこなし」彼の日の、彼の日の、梅の根に柳の葉、明かりなき路、明かりなき路に、寄る邊無き魂をば再び重ねし。

さて、柳夢梅が杜麗娘の墓を盗掘したと疑う杜宝と柳夢梅とが皇帝の前で対質する第五十五齣「圓駕」の次の詩では、柳夢梅は自らを「梅雪」に擬えている。

(生奚介) 古詩云『梅雪、争春未肯降、騷人閣筆費平章。』

(柳夢梅) 「笑うこなし」古い詩に『梅雪春を争ひて未だ降るを肯んぜず、騷人 筆を閣きて平章を費やす。』と申しております。

同じく第五十五齣の次の場面は、杜麗娘が本當に幽冥界から蘇生したことを自ら奏上する箇所であり、曾て夢の中で柳夢梅と契りを交わしたことを述べて、「柳」と「梅」との相関性を強調する。

(旦) 萬歲。臣妾二八年華、自畫春容一幅。曾於柳外梅邊、夢見這生。妾因感病而亡、葬於後花園梅樹之下。後來果有這生、姓柳名夢梅、拾取春容、朝夕掛念。臣妾因此出現成親。

(杜麗娘) 陛下の萬歲をお祈り申し上げます。臣妾は十六歳の春に、自ら繪姿一幅を描きました。以前、柳のそば梅の傍で、このお方を夢見たことがございました。ために戀い患いに罹って身罷り、後花園の梅の樹の根元に葬られました。その後、果して姓を柳、名を夢梅とおっしゃるこの方がお見えになり、わたくしの繪姿を拾い、朝な夕なに心にかけて下さいました。かくて、わたくしはこの世に現われ、契りを結んだのでございます。

更に同齣の柳夢梅の奏上は、曾て梅花樹の下で美女に將來を約束されたこと(第二齣「言懷」)を回顧したものである。

【南畫眉序】(生) 臣南海之絲蘿、夢向嬌姿折梅萼。果登程取試、養病南柯。

(柳夢梅) 臣こと南海に在りて菟絲松蘿之しく未だ娶らざるに、嬌し姿を夢見て梅花を手折る。かくて旅に出で應試せんとするも、病を南柯に養ふ。

そして、同齣末尾の唱における柳夢梅と杜麗娘との唱う歌辞は、二人の境遇を梅花に擬えた極めて象徴的なもので

ある。

【北尾】(生) 従今後把牡丹亭夢影雙描畫。(旦) 虧殺你南枝、挨暖俺北枝花。則普天下做鬼的有情誰似咱。

(柳夢梅) 今よりのちは、牡丹亭の夢と影、ともに描かん。(杜麗娘) 南枝の君のおかげにて、北枝の花は暖を受く。あまねく天下に、幽魂の情ある者、誰か我に似ん。

南枝が北枝を暖めたとは、もとより嶺南の梅花である柳夢梅が、嶺北の梅花である杜麗娘を生き返らせたことを意味している。

以上のごとく『還魂記』における梅花は、杜麗娘の場合は専ら柳夢梅に対する想いを惹き起こした端緒として描かれているが、柳夢梅の場合には落魄した生活を脱して栄達を贏ち得、同時に婚姻の宿縁を成就することを表徴する花のごとく描き出されているのである。話本と『還魂記』との間には篇幅に長短の差こそあれ、このように湯頭祖が作品中においてとりわけ柳夢梅と梅花との関わりに執着している背景には、梅花に対する何らかの意識が強く投影されていると考えざるを得ない。

四

湯頭祖が梅花を前節のごとく形象化せねばならなかった必然性を考察する場合、やはり彼の嶺南への流謫を等閑視することはできない。『還魂記』の執筆に当っては、臨川から徐聞に至る旅途において眼に触れた梅花の印象が湯頭祖の意識に強烈に働きかけたのではないか。そこで、湯頭祖が流謫の聖諭を受けた後の詩文に梅花がどのような形で現われているのかを中心に、謫地への途上、湯頭祖をして梅花に執着を示さしめた所以は何かを見てゆくことにする。

万曆十九年(一五九二)九月末、流謫の途上、梅嶺にさしかかった湯頭祖は、意に反した嶺南行の悲哀を「廣南聞鴈」

詩（『玉茗堂全集』・詩・十四）に詠んでいる。

傳道衝陽有鴈迴　傳へて道いふ　衝陽に鴈の迴る有り

炎州片影更飛來　炎州の片影　更に飛來す

似憐遷客思歸苦　憐れむに似たり　遷客の思歸　苦はなたしきを

爲帶鄉心過嶺梅　爲に郷心を帯びて嶺梅を過ぐ

故郷の江西と謫地広東との境界に位置し、古来、梅花の名所として知られる梅嶺において湯頭祖は、望郷の念に苛まれながらも、咲き誇る梅の花に眼を見張ったことであろう。湯頭祖の流謫は、佞臣が私権をほしのままにする現今の政事を憂えて、彼らを弾劾すべく「論輔臣科臣疏」（同・文・十六）を上呈したことに起因する。この上疏は擅權の佞臣の降調ではなく、逆に自らの流謫という結果を招いたのである。湯頭祖は梅嶺において、冬枯れの中を春に魁けて咲く高節なる梅花の姿を眼にし、腐敗した官界の刷新を願ひ孤高を持して上疏した自らと相通ずるものを感じ取ったのではないか。

次いで同年十月、広東に入った時に詠んだと覚しい「廣城」詩の其一（同・詩・十三）には次のように言う。

書題小雪後　書に小雪と題せし後

人在廣州迴　人は廣州に在りて迴る

不道雷陽信　道からざりき雷陽の信の

眞成寄落梅　眞成まじと　眞成に落梅を寄するを

広州を迂迴して謫地に向かった湯頭祖は小雪（旧曆十月七・八日）と題して雷陽の地へ便りを出したが、手紙に添えて送った梅花も雷州に着く頃には已に萎んでいようとも已むを得まい、と言うのである。屈大均の『廣東新語』卷二十五「木語」の「梅」の条に「廣は則ち秋末冬初、梅且に開き盡くす」とあることからすれば、湯頭祖が通った十月

初の梅嶺では梅花はあるいは綻び始めており、更に南に位置する広東に入った時には爛漫と咲き誇っていたのではないか。結句の「落梅を寄す」とは、やがて謫地雷州に足を踏み入れる自らを落梅に比擬しているのであり、敗残の姿をさらけ出す落梅のごとく遷客として徐聞に身を置く自らを思い描いて、流謫の悲哀を一層深めたであろう。

梅嶺越えの際に寒さを堪え忍んで綻ぶ梅花を眼にした湯頭祖は、独り超然と佞臣を奏劾した自身との共通性を見出し、広州においては佳期を過ぎた落梅を想起して、謫地へと赴く落魄した己が姿が影写されているかのごとくに感じ、悲痛な心情をいやが上にも駆り立てられたことであろう。

また「嶺外初歸、讀王恆叔點蒼山寄示『五岳遊』、欣然成韻」詩（同・詩・十二）中には、望郷の念に苛まれたつづ謫地徐聞に向かわねばならぬ苦悩は梅花では癒す術もなかったことを詠んだ句が残されている。

傷心有客梅難寄 心を傷ましむれば客の梅もて寄せ難き有り

生意何人樹不堪 意を生ずれば何人も樹もて堪へじ

瘴嶺夜珠迴合浦 瘴嶺の夜珠 合浦を廻る

臨川小築寄香楠 臨川の築 香楠に寄す

『臨海縣志』巻九「人物志」によると、王士性、字恆叔は、万曆十九年、粵藩から滇臬副使に転じており、巡察の途上、五岳を遍歴して『五岳遊記』十二巻を残している。上掲の湯頭祖の詩は、王士性のこの遊記読後のものであり、詩題よりすれば万曆二十年、徐聞から初めて故郷に帰った時に詠んだものと思われる。「心を傷ましむれば客の梅もて寄せ難き有り」とは、流謫の旅途の追憶であり、爛漫と咲き誇る梅花では、それとは全く対照的な落魄した己が傷心を託して送ることはできなかったと言っているのではないか。

更にここに掲げた詩句と同様のものが、万曆二十一年から万曆二十六年の間、徐聞から量移されて浙江の遂昌知県の任にある時の作と覚しい「和劉季德平昌一蓋樓撫琴贈別」詩（同・詩・八）にも用いられている。

爲領佳山到却回 佳山を領めんと爲すも却き回るに到る

石門南望即天台 石門より南望すれば即ち天台

郷心度嶺梅難寄 郷心 嶺を度るも梅は寄せ難し

秋意登樓鴈欲來 秋意もて樓を登れば鴈來らんと欲す

疎竹風泉長自遶 疎竹 風泉 長く自ら遶り

一燈花雨向誰開 一燈 花雨 誰に向ひて開く

祇應拂拭江湖外 祇だ應に江湖の外へ拂拭すべし

浪柁琴歌酒數盃 浪柁 琴歌 酒數盃

第三句「郷心 嶺を度るも梅は寄せ難し」とは、前掲の詩と同じく徐聞流謫の途次、梅嶺を越えた時の追憶である。故郷を思う心に苦しみながら嶺を越えるけれども、梅花ではその悲愴な気持ちを託して送り難かったと言うのである。

また「寄張聖如嵯使」(同・尺牘・五)には次のように言っている。

人を觀る者は、之れを酒に酔はしめて以て其の恭を觀、之れに財を予へて以て其の廉を觀る。今、門下に試みる所の者は、衆醉・衆濁の地に非ざらんや。石門の敵は夷・齊に心を比べよ。門下當に道有りて此に處るべきに、積水奮飛、未だ量る可からず。庾嶺の南枝、時に勤めて夢想せよ。惟だ益益冰雪よりも堅くして、以て春陽を候つべし。

この書翰の執筆年月は詳らかではないが、鹽運使の任にある門人張聖如に、恐らく自らの經驗を踏まえて官界での処世の術を説いたものと思われる。「石門の歌」とは、『晉書』卷九十「吳隱之傳」に言う、「不正の横行する広州を改革すべく龍驤將軍・広州刺史・仮節に任命された吳隱之が、石門の貪泉に至ったところで、『古人云ふ、此の水は一敵

にして千金を懐ふ、と。試みに夷齊をして飲ましむるも、終に當に心を易へざるべし。』なる詩を賦した」という故事を踏まえている。^⑧つまり羅浮山中の石門では貪泉の水を口にしようとも、呉隱之の言うごとく伯夷・叔斉に倣って邪心を起こさずに甘んじて艱難を受けよと言っているのである。また時には蕾のまま氷雪に堪え春の陽気を待つ梅嶺の梅花を想い起こし、いずれ花開くことを夢想して逆境に堪えよとも言っているのである。ここに言う石門や梅嶺は湯頭祖が流謫の途次に通った場所であり、この書翰にはその時の彼の感懐が如実に表徴されているのではないか。すなわち石門の伯夷・叔斉といい、梅嶺の梅花といい、いずれも当時の湯頭祖の境遇が重ねられており、苦境における身の処しかたについて往時を回顧しつつ門人を戒諭しているのである。

以上に掲げたように、流謫以降に書かれた詩文中において、実際の開花を眼にしたか否かはともかくとも、梅花を自分自身に比擬し、あるいは自らの悲痛な心情と比較しようとしていることは極めて象徴的である。古来、梅花は寒雪に堪え、逸早く花を開くことから、春の魁のイメージ^⑨を持っている。湯頭祖は流謫という処遇を蒙り、望郷の念に駆られながらも帰郷の叶わぬ落魄した己が心情を、咲き誇る梅花には託す術もないという諦念を抱きながら、一方では厳しい冬を乗り越えて綻ぶ梅花のごとく、苦境から脱却できる日の到来を希求したのではないか。『還魂記』がこの流謫以後に構想、執筆されたことからすれば、前節に見た作品中の梅花には、流謫によって齎された悲哀の超克を願った往時の作者の心情が、柳夢梅の栄達の物語を通して如実に投影されていると考えることができよう。

五

ところで『還魂記』には、いま一つ考えておかなければならない問題がある。『紫簫記』・『紫釵記』には蔣防の「霍小玉傳」を、『南柯記』には李公佐の「南柯太守傳」を、『邯鄲記』には沈既濟の「枕中記」をと、いずれも唐代の

伝奇小説を藍本にしているにも拘らず、何ゆえ『還魂記』だけが「杜麗娘記」なる話本を藍本にしているのか。

湯頭祖は『還魂記』執筆に際しては、当然、夢を媒介とし、かつ「情」を主眼とした戯曲の執筆という自らの創作理念に合致した先行作品を求めたはずである。しかもその執筆の時期を考慮に入れると、流謫という辛酸を嘗めた自らを慰藉しようとする意識が強く働いたであろう。とすれば流謫の旅途、羅浮山や梅嶺、広州で我が身と同じ境遇にあると感じ、心を慰めてくれると同時に、流謫の悲哀を増幅もさせた梅花を作品中に織り込もうと意図したことは想像に難くない。そこで上述のごとき梅花樹のモチーフが組み込まれている作品を求めた結果、「杜麗娘記」が選択されたのではないか。こうした特別な感懐を描き出すために、他作品とは異なって話本を藍本に用いているのである。必ずしも充分な証左とは言いが、あるいは藍本に「杜麗娘記」を用いた根拠の一つと考えてもよからう。

さて、前節までに述べてきたように作者自らの心情を、劇情、あるいは作品中の人物に託した作品として、『紫釵記』と『邯鄲記』の二作を挙げることができる。岩城秀夫氏によれば、『紫釵記』を藍本の「霍小玉傳」、更に習作の『紫簫記』と比較したとき、盧太尉、及び黄衫の豪客の存在がとりわけ顕著であるとされる。すなわち盧太尉の形象には、湯頭祖が万曆五年（二五七七）、万曆八年（二五八〇）の二度にわたる会試落第の遠因となった人物張居正が投影され、黄衫の豪客には湯頭祖自身の姿が映し出されていると言われる。⁴⁵『紫簫記』の執筆は万曆八年、その改作『紫釵記』は万曆十四年（二五八六）の執筆であるから、張居正の没後、万曆十一年（二五八三）によりやく進士に合格した湯頭祖が、往時を回顧して譏刺を託したという岩城氏の所説は充分な妥当性をもつ。また『邯鄲記』には盧生の受験結果が、考官宇文融の権力によって左右されそうになる場面がある。この場面の宇文融についても岩城氏は、『紫釵記』同様に張居正の姿が投影されていると言われている。⁴⁶『邯鄲記』は万曆三十五年（一六〇七）前後に完成したと思われる、曾て辛酸を嘗めた不当な試験について譏刺を託したという解釈はやはり説得力をもつものである。更に蔣星煜氏によれば、『還魂記』第四十一齣「耽試」においても、考官苗舜賓が本来は「猫の眼」で文墨には通じないにもかかわらず、「蠻人の

寶石を能く鑒定した」ので朝廷に重用され、試験を掌ることになったというくだりには、人材登用に際する不正が暴露され糾弾されていると論じられている。^⑤このように自らの経験に基づきつつ様々な形で作品中に譏刺が託されていることからすれば、万曆十九年の徐聞流謫以降の経験を踏まえ、万曆二十六年の臨川閑居に相前後して執筆された『還魂記』中に、流謫に対する湯頭祖の心情が影写されていると見ることは、必ずしも外的ではなからう。

ともあれ以上のごとく、湯頭祖が流謫の旅途において梅花に対して抱いた感懐は、柳夢梅を媒介として『還魂記』に投影されている。劇の表層からすれば、確かに杜麗娘が「柳」の枝を手にした書生を恋慕い、「梅花」に心を奪われて命を落とし、柳夢梅によって蘇生させられた、という慕色と還魂の物語ではある。こうした観点からすれば、作品中において「柳」と「梅」との相関性を殊更に強調しているのは、単に藍本の「杜麗娘記」を敷衍させたものと考えられなくもない。しかしながら「柳」だけでなく、嶺南から北上した「半枝梅」も柳夢梅を意味していることは決して閑却できない。更には流謫の旅途における一連の詩作において、あるいは自らの境遇を梅花に重ね、あるいは流謫の悲哀を梅花に寄せる術もないという諦念を抱いた詩句を詠み、また門人に宛てた書翰において、氷雪の中、春の訪れを待つ北枝の梅のごとく苦境に堪えよと言っていることも忽視できない。湯頭祖は梅花同様に苦境に堪え忍び、やがてそこから脱却したいとの願いを込め、自らの境遇を敢えて梅花のそれに比擬し、自己と同一視しているのである。作品中に「半枝の梅」が嶺南より北上し、終幕において「南枝の梅」が「北枝の梅」を暖めたと言うのは、表面的には柳夢梅が杜麗娘を蘇生させたことを意味している。しかしながら根柢においては、自身の理想像として形象化した柳夢梅に、寒雪に堪え忍んで花を開く梅花のごとく苦境から脱却したいという心情を寄託し、柳夢梅の栄達をその具現として描き出しているのである。

以上を要するに、湯頭祖にとつての「梅花」は、流謫の苦悩を打開し、輝かしい将来を夢想させてくれる花であった。その「梅花」が『還魂記』に織り込まれたとき、自らの理想像のごとく形象化した柳夢梅は「梅花」と同格のも

のとして描かれ、栄達という自らの果し得なかつた夢の実現が寄託されている。すなわち『還魂記』における「梅花」には、流謫の旅途における湯頭祖の心情がそのまま投影され、辛酸を嘗めさせられた官界に対する憤懣を鎮め、輝かしい未来の到来を約束してくれる希望のごとく描かれているのである。言い換えるならば、官を辞し故郷に退隠した湯頭祖の、現実への諦念と将来への夢想との葛藤の所産が『還魂記』における「梅花」なのである。

注

- ① 『還魂記』が音律に協わず、上演に適さぬとして改編されたことについて湯頭祖は、たとえば「與宜伶羅章二」（『玉茗堂全集』・尺牘・六）に「牡丹亭記」、要依我原本、其呂家改的、切不可從。」と言っている。しかし実際に読曲の性格が強かったことは、馮夢龍『墨憨齋重定三會親風流夢傳奇』小引に「識者以爲此案頭之書、非當場之譜」と言うこととくである。
- ② 「論輔臣科臣疏」（『玉茗堂全集』・文・十六）の上呈により万曆帝の怒りを買ひ流謫されることとなった。この間の経緯は、八木沢元氏『明代劇作家研究』（講談社、一九五九）四二八頁、四九二頁、また岩城秀夫氏『中国戯曲演劇研究』（創文社、一九七三）七二頁以降に詳述されている。
- ③ 同様の視点から、拙稿（a）『還魂記』における柳夢梅像の設定（『日本中国学会報』第四十一集、一九八九）、（b）『還魂記』における真と仮の問題（『広島文教女子大学紀要』第二十五巻、一九九〇）において、湯頭祖の人生と『還魂記』との相関性について触れた。
- ④ 侯外廬氏の「湯頭祖牡丹亭還魂記外伝」（『論湯頭祖劇作四種』、中国戯劇出版社、一九六二、所收。原載『人民日報』一九六一年五月三日版『牡丹亭』外伝）には『還魂記』には自然の梅柳に暗黒の世界を衝き破って訪れる光り輝く将来の到来を待つ心が寄託されている」という趣旨の見解が示されているが、必ずしも論拠が明確ではない。因みに田中謙二氏は『戯曲集（下）』（平凡社、一九七二）の「解説」において、湯頭祖など南戯の作者がおおむね士大夫階級に属し、かつ彼らのうち何人かは「なんらかの理由で官途を挫折して退官後、戯曲の制作に専心していることは、注意しなければならない」と述べられている。
- ⑤ 岩城秀夫氏『還魂記の藍本』（『吉川博士退休記念中国文学論集』、筑摩書房、一九六八）。また注②『中国戯曲演劇研究』、二一五頁〜二三〇頁。尚、本稿では最も古い形を伝えていると思われる何大掄編『重刻增補燕居筆記』（宮内庁書陵部蔵）巻九所収の「杜麗娘記」を用いた。

- ⑥ 注③拙稿 (a)。
- ⑦ 注③拙稿 (b)。
- ⑧ 『龍城録』は柳宗元の撰に成るとの説もあるが、宋の何遠「春渚紀聞」巻五「古書託名」の条に王銍の偽作というごとくである。尚、該書の編者については Hans H. FRANKEL 氏「The Date and Authorship of the Lung-cheng lu」(Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusyo, Kyoto University, 1954) に詳述されている。
- ⑨ 崔子玉については詳らかではないが、翟細祖については「東莞縣志」巻六十一「人物略」に「字從先、守謙子。少負奇節、有經世志。」とある。
- ⑩ 『還魂記』第十八齣「診祟」には「貼・春香」師父、可記的「毛詩」上方兒。(末・陳最良) 便依他處方。小姐害了君子的病、用的史君子。……(貼) 還有甚藥。(末) 酸梅十箇。『詩』云『標有梅、其實七兮』、又說『其實三兮』。三箇打七箇、是十箇。此方單醫男女過時思酸之病。」とあり、梅の實には花期を過ぎた男女の思いを癒す効能があるとしている。また李時珍「本草綱目」巻二十九「果部」の「梅」の条には「梅者、媒也。媒合衆味。故『書』(說命下) 云『若作和羹。』」と明記されている。このほか『金瓶梅詞話』第二回「西門慶簾下遇金蓮 王婆子貪賄說風情」における王婆と西門慶との会話「王婆做了個梅湯、雙手遞與西門慶喫了。將盞子放下、西門慶道『乾娘、你這梅湯做得好、有多少在屋裏。』王婆笑道『老身做了一世媒、那討得不在屋裏。』」に見える「梅湯」も「男女の仲を取り持つ」意を寓している。
- ⑪ 『晉書』の原文は次のごとくである。「隆安中、以隱之爲龍驤將軍・廣州刺史・假節、領平越中郎將。未至州二十里、地名石門、有水曰貪泉、飲者懷無厭之欲。隱之既至、語其親人曰『不見可欲、使心不亂。越嶺喪清、吾知之矣。』乃至泉所、酌而飲之、因賦詩曰『古人云此水、一飲懷千金。試使夷齊飲、終當不易心。』」また湯頭祖は「爲士大夫喻東粵守令文」(『玉茗堂全集』・文・九) においても「酌石門之泉、士大夫必不爭渡矣。」と言っている。
- ⑫ 湯頭祖は南京から故郷の臨川に帰った後、贛州を通じて梅嶺を越え、更に広州を經由して徐聞に赴いた。因に石門は先に掲げた『遊羅浮山賦』序(『玉茗堂全集』・賦・二)に「經石門」とあるとおりであるが、『史記』卷一一三「南越傳」の「索隱」に引く『廣州記』には「(石門) 在番禺縣北三十里。昔呂嘉拒漢、積石鎮江、名曰石門。」と言う。
- ⑬ 例えば梁の簡文帝「梅花賦」には、「梅花特早、偏能識春」とあり、梅の開花が春の魁であることが強調されている。
- ⑭ 注②「中国戯曲演劇研究」二〇七頁。
- ⑮ 注②「中国戯曲演劇研究」三一八頁。

- ⑯ 「湯頭祖対張居士之認識及其在劇作中の曲折反映」(『湯頭祖研究論文集』、中国戯劇出版社、一九八四、所収。原載『中華文史論叢』一九八三年第二期)。因にこの論文には、前述の『棠叙記』・『邯鄲記』における譏刺についても論じられている。
- ⑰ 注③拙稿(a)。